

生命の實相 第30卷

兒童教育編・聖典講義遍

第四章 革新的教育法の効果を語る

山上の垂訓の示す心理

(155)

山上の垂訓「心の貧しき者」

○イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給えば、弟子達御許にきたる。イエス口をひらき、教えて言いたまう、「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。」

（「マタイ伝」第五章一一三）

これは「山上の垂訓」といって、有名なところでありまして、イエスがヨハネに洗礼を受けてから、ヨルダン河の畔で四十日四十夜断食をして、坐っておられましたがいよいよ靈覺を得て悟りを開かれた、その悟りの心境をば初めてここで説教された最も重要なところであります。

「幸福なるかな、心の貧しきもの。天国はその人のものなり」とこうありますが、この「心の貧しき者」というのはどういう意味であるかと申しますと「心の高慢でないもの」という意味であります。高慢であるということが最も神に近づく邪魔になるのであります。高慢でないことを「生長の家」では「心が貧しい」という言葉を使うのであります。高慢である人は心の水圧が高いのでありますから、いくら真理の水

の流れを供給して差し上げてもその人の方へは流れて行かないのであります。この高慢であることと、「自分自身を尊べ」という「智慧の言葉」とは似ているようでも大変ちがうのであります。自分自身を尊ぶということは、「自分の本当の實相が神の子である」その実相を尊び崇めるということでありまして、これは最も必要なことであります。しかし自尊と高慢とは異なるのであります。本当の自分としてモット立派な存在のあることを知らずに、「偽存在の自分」に満足して、それで充ち足りたつもりでいる、これが「心の貧しくない」人、心のたかぶっている人のことであります。

神は「和解」の中に在す

その次に、供え物を祭壇にささぐる時に、兄弟に怨まることがあるということを思い出したならば、供え物を祭壇の前へ遺しておいて、まず兄弟と仲良しになってから神様を拜めということがありますのは、『生命の實相』の巻頭にある、あの「和解の神示」と同じことであります。神様というものは靈媒に招んで憑ってきたりするようなものでもなければ、あるいは憂い悲しんで神前に平身低頭しておったら神様に感應するというふうなものではない。神は渾ての渾てであって、渾て一つであるのでありますから、我と他、彼と我とが一つに繋がる和解のうち、愛のうちに神というものはあるという

ことがあの神示に書いてある。——それと同じ真理をイエスはここで教えていられるのであります。

イエスの教えも、生長の家の教えも、形式的に祭壇の前でお辞儀するだけが神様と一体になることではないのであります。神様と一体になりたければ神様の心になる。神様の心とはどういう心かというといっさいのものはみんな神様の造り給うたものである。いっさいは神様である。いっさいを一つに結び合わせていっさいを包んでいるのが神様である。であるから、われわれはいっさいを結び合わせ、包摂しみんな仲良しにして手を繋ぎ合ったところにそこに神様というものが出てくるのです。だから、兄弟と争っているような気持があった場合にはその氣持を捨ててしまった時に初めてそこに神様がある。そういう心で神様に祈ったら必ず祈りが叶えられるということになるのです。そうでなしにむやみに祭壇の前へ行つて神様にばかりオベツカついてお辞儀をして、一方では兄弟と心で争っているというのでは本当にこれは神様と一つになれないのであります。それでその次にはこうあります。

○「姦淫するなかれ」と言えることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷^{いだ}きて女を見るものは、既に心のうちに姦淫したるなり。もし右の目なんじを躓^{つまず}かせば、扶^{くじ}り出して棄てよ、五体の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。もし右の手なんじを躓^{つまず}かせば、切り捨てよ、五体の一つ亡びて、全身ゲヘナに往かぬは益なり。

今までのユダヤ教の教えでは形式の教えになっておったのが、ここでは心の教えになつていたのであります。「姦淫したものは石にて打ち殺せ」というふうなユダヤ教の掟があったけれども、イエスの言われるのはそういう形のことだけで言われるのではない。「われは律法を成就せんがためにきたのである」そんな形式的の片手落ちの律法ではない。もっと深い教えである。それは心の方面をいっておられるのであります。「色情を懷きて女を見るものは、すでに心のうちに姦淫したるなり。」これはやはり心の法則でありまして心に起こったことが形に現われる。しかし心に起こったことが必ずしもすぐに形に現われて来ない。ある場合にはそれが長い間蓄積されていてそうしてそれが後になつてはじめて現われることがありますから、「わたしは何もそんな心を起こさぬのにこんなになつた」というふうな人もありますが、ある人は前生にそういうふうな心を起こしたのが今生に出てきているのもあるのであります。ともかくも、心にそういう罪を犯したならばそれは形に犯したのと同じことである、こういうぐあいにイエスはいわれたわけであります。

集団の祈りの功德

○誠に汝らに告ぐ、もし汝らのうち二人、何にても求むる事につき地にて心を一つにせば、天にいます我が父は之を成

し給うべし。二三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり。

こういうふうに一入また三人と集まって祈ると、祈ることを天の父が成し給うと書いてあります。全然一人でなくて心を共にするものが多勢おおぜい「求めることにつきて地にて心を一つにせば」いっそう効果が多いというのは、多勢の者が一つになって、念波を合わせて祈ることは、念の共鳴によってその祈りの念波が拡大するからであります。「隠れたるに在います汝の父」というのは、「自己に内在するわが父」すなわち実相であって、この「内在の父」に祈るということは実相と調和するという念を起こすことであります。実相においてはすでにわれわれは「必要なるすべて」を与えられている。しかし、実相と調和しない念を起こしている場合には、波長が合わなければテレビジョンに電送映画が映らないと同じように、その与えられているすべてが現象世界に現われて来ないのであります。「祈り」というのは実相を現象界にもたらすために、換言すれば「み心の天に成るがごとく地にも成らせる」ためであります。ところが多勢集まって祈る場合には、波長の合わない少数の念が混っている場合にも、集まっている大多数の念が実相に調和した念を起こすために、実相を現象界に導き出す力が強いということになるのであります。

ですから、信仰を共にする人だちと一緒に集まって実相を念ずる、すなわち「内在の父に祈る」ということは非常に効

果があります。しかし多勢集まって祈る場合には、多勢いるだけに、大声をあげて、わたしはかくのごとく信仰が深いというふう他に虚栄心でみせびらかすために祈るように危険が伴いやすいのです。そういう場合には、多勢集まって祈ることがかえって虚栄心を増長さすところの祈りになる。そういう誘惑に乗り易い人々のために、イエスは「密室の祈り」を勧め、念波の共鳴で実相と調和する念の増大を目的とするために集団の祈りを勧められたのであります。そういう意味においてわれわれは、ある時にはただ一人自室に籠って聖典を読み、一人端坐して実相を念ずることも必要であります、時々信仰厚き人たちが多勢集まっていられて、実相を念ずる念波が増大強化した磁場すなわち道場の中へ這入って心を一つにして実相を念じて、ややもすれば迷いに捉えられようとする自分の念を実相化することも必要であります。